

永井荷風といえば、若き日の谷崎を評価し、その文壇デビューを後押しすることになった作家である。谷崎にとっては、恩人ともいえる存在だ。そんな荷風を、谷崎は終生師と仰ぎ続けたが、その「荷風先生」へ宛てられた谷崎の一通の手紙が、谷崎記念館にはある。書かれたのは、1945（昭和20）年7月12日。8月15日の日本の敗戦によって第二次世界大戦が終結する、ひと月余り前のことである。当時谷崎は、岡山県勝山に疎開していた。手紙は、その頃、東京を逃れ岡山市街に避難していた荷風に送られた。

内容は、谷崎のいる勝山に、荷風も移って来るよう勧めたもの。自分の近くでの方が、何かと都合よく便利で暮らしやすいであろう、との心遣いである。敗色濃厚の戦時下、旅先の荷風の不自由難儀を慮った書面は、恩人とも師とも慕う先輩作家への敬意に溢れている。さらに、手紙では、移住に向けた様子見がてらの、勝山への来訪を誘いかけてもいる。

そして、8月14日の朝、荷風は勝山の宿にいた。手紙の誘いに応じたかたちである。早朝7時、谷崎は荷風のもとを訪れ、晴れた勝山の町を案内した。お盆の最中のこと、土地のならわしでもあろうか、昼は餅米で赤飯を炊き、豆腐の吸物で荷風をもてなす。そして、夜。2貫目を超す牛肉と日本酒2升を手に入れた谷崎は、スキヤキの宴に荷風を招くのである。

2貫目超えといえば、8kgにも手が届きそうなことになる。谷崎の「疎開日記」によると、この時の牛肉は1貫目200円とあるが、この頃、東京の都民食堂では夕食が50銭であった。仮に、この夕食50銭を今の500円とみれば、牛肉1貫目200円は20万円、2貫目強となると40万円を超える。そこに日本酒2升というのだから、糸目をつけない大盤振る舞いもさることながら、食料・物資入手至難の当時、これだけのものをどこでどうして取り揃えたのか、その算段苦心には恐れ入る。やはり、谷崎にとって、荷風は特別の存在であったに違いない。

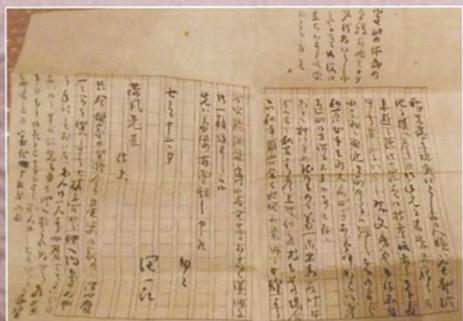
さて、夕刻からの宴は、賑やかに9時過ぎまで続いた。宿に戻った荷風は、深夜の空襲警報に気づきながら、起き上らずにやり過ごす。そして、明るる8月15日は曇天。風が涼しい。入手困難なはずの岡山行きへの切符は、これも谷崎がすでに用意してある。送られて汽車に乗り込んだ荷風の手には、谷崎の妻松子が持たせた弁当があった。白米のむすびに昆布の佃煮と牛肉が添えられたその弁当を開き、「欣喜措く能わず」（永井荷風「断腸亭日乗」）と、車中の荷風が昨晩の贅の余韻に浸っていた、ちょうどその頃、玉音放送は日本の敗戦を告げていたのである。

こうして、2人の文豪の宴のひと幕は、日本の敗戦の時と交錯しながら印象深い逸話となった。谷崎記念館に収められた、谷崎の荷風への手紙は、その序章となるものだったのである。

（芦屋市谷崎潤一郎記念館学芸員 井上勝博）



永井荷風



昭和20年7月12日 永井荷風宛谷崎書簡



勝山での谷崎 (1945年秋)

谷崎記念館だより 2025

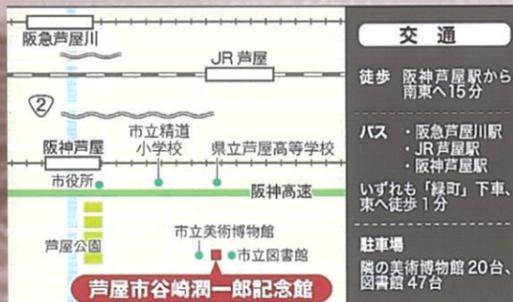
2026年3月1日発行

発行者 芦屋市谷崎潤一郎記念館

〒659-0052 兵庫県芦屋市伊勢町12-15

Tel 0797-23-5852 Fax 0797-38-3244

HP: <https://www.tanizakikan.com/>



谷崎記念館だより

残月

第39回 残月祭

しばさき ともか 柴崎友香講演会 「話し続けるための言葉」

文豪・谷崎潤一郎を偲び、誕生日を祝う「残月祭」。7月24日の誕生日に近い、20日(日)に芦屋ルナホールにて行った。

今回は、作家の柴崎友香さんにお越し頂き、「話し続けるための言葉」というタイトルでご講演頂いた。

2024年に、『続きと始まり』で谷崎潤一郎賞を受賞されたご自身の創作と、谷崎文学の共通点として、大阪の話し言葉を使い、生活のサイクルを描いている点を挙げられた。関東大震災に被災した谷崎が関西に移住し、日本回帰を果たした昭和初期の作品を中心に、作品の朗読を交えながらお話しされた。

文楽人形に永遠女性の美を見出した「蓼喰う虫」では、京女お久が語る京言葉と大阪弁の違いを挙げられ、巧みに描き分けられていると指摘された。また、作品に声を描ける作家はいないとし、

谷崎の耳の良さとそれを生かして創作されていると述べられた。「卍」や「細雪」など、大阪弁を生かした谷崎作品を取り上げ、人と人をつなげ、語り続ける力を持つ大阪弁の特性と、それを巧みに生かした谷崎文学についてお話しされた。

柴崎さんのお話に来場者は熱心に耳を傾け、谷崎文学の世界を堪能した。



柴崎友香氏

芦屋市谷崎潤一郎記念館

春の特別展

潤一郎、終活する

—文豪谷崎 死への挑戦—

1965(昭和40)年夏、谷崎潤一郎は世を去る。79歳の誕生日を迎えたばかりであった。当時としては珍しいほどの長命だった文豪。晩年と呼ばれる、終わりの時を迎えつつある時期も長かったが、その間にも多くの名作・傑作・話題作を執筆し続けた。

日本が敗戦を迎えた1945年8月、60歳を目前にした谷崎は、「細雪」下巻の執筆にいそんでいた。戦時下では「発禁扱い」であった、この生涯の名作の刊行完結が、1948年12月。その時、谷崎は、当時の平均寿命をすでに超えていた。「細雪」は、文豪にとって、戦後へのそしてその豊かな晩年への一里塚だったのである。

「細雪」以降、文豪じしんの現在とも重ね合わせられながら、「古い」や「病(やまい)」そして「死」の問題が、創作の中心に据えられていく。その核心に、「性」をはじめ「母恋い」や「女性崇拜」など、かねて追求められてきた多彩なテーマも絡まり合いながら複雑に織り成されていく作品世界は、芳醇でユニークである。死の間際まで続けられた、そのエネルギーに富んだ執筆活動。それは、作家として人としての人生の集大成であり、死への挑戦の営みでもあったのだらう。

谷崎没後60年 2025年3/15(土)~6/8(日)



『細雪』冒頭部自筆原稿(複製)

没後60年の春、文豪谷崎潤一郎豊穡の晩年、その「死へ挑んだ総括」—「終活」の有り様を跡づけた。

夏の特設展

オン・ステージ

—舞台の上の谷崎作品—

谷崎文学は、「話の筋」のおもしろさ、「物語性」の豊かさを真骨頂とするともいわれる。それもあってか、舞台化される作品も多い。

劇的な作品の中でもドラマティックな「春琴抄」は、とりわけ多様に翻案されてきた。幼少から馴染み深い歌舞伎のエッセンスは、さまざまな作品へと反映し、それがまた、はね返っていくかのように歌舞伎化された。「細雪」「巨匠太平記」の通俗性は、「大衆文学」に共感した谷崎の一面でもあり、その親しみやすさは、商業演劇の娯楽の世界と近い。

文豪谷崎潤一郎の作品世界の幅の広さ懐の深さが、多彩なジャンルの舞台と響き合い、血肉を得ていくさまを紹介した。



『細雪』劇場公演歴代のチラシと2014年明治座講演のプログラム

冬の特設展

2025年12/13(土)~2026年3/8(日)

新人さん、いらっしやい! —新着資料顔見世—

谷崎記念館所蔵の数多くの資料は、さまざまな生い立ちと遍歴を経て、たどり着いて来た。その中から、近年新たに仲間となった「新人さん」たちの、「顔見世」である。

師と仰ぐ先輩文豪永井荷風に宛てられた、敗戦時の二人をめぐる有名なエピソードを導いていく谷崎の手紙。なぜかバラバラに裁断された、小説の原稿。馴染みの医師への書簡に垣間みられる、家族思いの谷崎の一面。日本人で最初に授与されたアメリカの文芸アカデミーの会員証は、文豪最晩年の栄誉を輝かしく縁どっている……。

多士済々の新人さん、それぞれの魅力を、存分にアピールしていただいた。



『肉塊』直筆原稿

ロビーパネル展(秋)

2025年10/29(水)~12/7(日)

挿絵の森への誘い

—等身大立体パネルで体感する谷崎作品の世界—



「細雪」の主人公たちから、人魚や魔術師や美女、犬に人形まで…。谷崎作品を彩る数々の挿絵のキャラクターたちが、そのものの姿形と迫力のスケールの等身大立体パネルとなって林立する挿絵の森。そこは現実なのか、物語の世界なのか…。幻の挿絵の森を、文豪の名文とともに、さまよい歩き楽しむ、体感型のパネル展。



「梅ノ谷の家」一階の扉と谷崎館庭園



秋の特別展

2025年9/13(土)~12/7(日)

文豪は戦の間に咲く —谷崎の戦争と平和—

鹿鳴館のざわめき華やぐ東京に、谷崎潤一郎(1886~1965)は生れる。「脱亜入欧」の明治国家は、列強と対等自立の関係を築こうとしていた。武力を背景に、周辺諸国への支配をともなう「帝国日本」の自立への道である。

20代半ばの谷崎が「刺青」(1910)で文壇デビューを果たす頃、日本は帝国の輪郭をようやく明らかにする。欧米列強に連なった日本は、やがて、人類初の世界戦争、第一次世界大戦(1914~1918)に参戦。ヨーロッパが主戦場のこの大戦で、戦勝国となった日本の損害は少なく、大きな経済的恩恵もたらされた。その好景気も背景に、近代化が進展。都市大衆社会が勃興、「郊外」という新たな居住圏も出現し、新しい生活様式と文化が発展する。大正デモクラシーとその文化の謳歌の時代である。一方で、帝国支配の展開は、日本社会の視界を広げ世界観を多様化させながら、やがて国際的な摩擦を生み出していく。そうした中で、谷崎は作家活動を本格化させていった。

そして、「細雪」は、郊外に暮らす新しい中産市民の、穏やかで豊かで美しい日常を描いて文豪の代表作となった。この名作は、第一次大戦以降の日本と世界の変容を家族の日常の中にとらえ返し、普遍的価値にまで昇華させたのである。物語は、中国との戦争が始まる前年の1936年秋に始まり、1941年春に幕を降ろす。その冬、日本は第二次世界大戦に参戦、この世界戦争は日本の破滅的な敗北によって終結した。が、「細雪」の生活世界は、戦争の奔流をも埋没せしむるびて、新しい時代を導く力さえ秘めていた。

戦争と平和との間、大きく揺らぐ日本と世界の有り様を受けとめ、花開いていった文豪谷崎。その豊かな作品世界を読み解いた。

